九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

What is it - the Exile from the Fukushima Nuclear Power Plant Disaster? : Considering from the Perspective of Heidegger’s Philosophy

鏑木, 政彦
比較社会文化研究院文化空間部門 : 教授

https://doi.org/10.15017/1812529

出版情報：地球社会統合科学. 24 (1), pp.1-11, 2017-07-25. Graduate School of Integrated Sciences for Global Society, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

『地球社会統合科学』第24巻 第1号（2017）1～11
Bulletin of the Graduate School of Integrated Sciences for Global Society, Kyushu University
Vol.24, No.1 (2017), pp. 1～11
©2017 Masahiko KABURAGI

論 文

「被災地／避難先に＜住む＞ということ
―ハイデガー哲学の視点から」[1]

What is it - the Exile from the Fukushima Nuclear Power Plant Disaster?
Considering from the Perspective of Heidegger's Philosophy.

2017年5月16日提出，2017年6月9日受理

鏑 木 政 彦
Masahiko KABURAGI

キーワード：東日本大震災、福島第一原発事故、ハイデガー、住まう、故郷喪失

「きっと、他人からみたら、「なんでこんな山奥に帰りたいのか」と言うんじゃないかと思います。東電の人なんて「移住は転勤と同じです」なんて言いますから。でも、違うんだ。そこが、俺にとってはひとつの場所なんです。」（鴫原良友さん（64歳）福島県飯館村長泥地区→福島県福島市）[2]

「避難から４年が経つと、だんだん、「住むこと」って何だろう？　ってなってくる。「転勤」の理由は仕事でしょ。でも、俺の「避難」は放射能でしょ。それは明確なんだよね。だって、本当は東京にいる必要ないんだもん。安心して暮らすことができないから、今も避難しているんであって。」（市村高志さん（45歳）福島県富岡町→川内村→埼玉県→東京都練馬区→足立区）[3]

はじめに

本稿の目的は、東日本大震災と福島第一原子力発電所の爆発事故によって、住む場を奪われ、以前のように暮らすことができなくなった人びとが受けた被害とはどのようなものであるのか／あったのか、またそのような被害をもたらした背景に何があったのかを、ハイデガー哲学の視点から読み解くことである。

まず、原発事故に伴う避難や、避難指示解除後に避難者が直面している事態とは、どのような問題なのだろうか。この問題をあらためて考えてみると、果たしてそれが何であるのか、全く自明でないことに気づかされる。それなのに、耳に届いてくる言葉の多くは、問題をすでに自明なものとして扱っている。曰く、補償をもらっているのだからそれで十分ではないか、除染をしたところで無駄ではないのか、放射線量の高いところに戻ろうとするなんて理解できない、避難のコストは避難している人の自己責任でやってほしい等々。自分の理解や考えが間違っているかもしれないという可能性を想像せず、被災者の行動や発言を批難する言葉が生み出され、そして問題は片付けられ、忘れられようとしている。

このような無理解や無関心の原因の根は深く、この論考が能く解明し得るところではない[4]。しかしながら、哲学的考察が何かしら社会の課題を考え直すことに貢献できるとすれば、その一つは、自分や他人がどうしてそのように考えるのかを理解し、それぞれの妥当性を考えるための材料を提供することであろう。そのために本稿が試みるのは、「住まう」とはどのようなことである

[1] 本稿は、2016年10月９日に九州大学で開催された、日本社会学会開催校企画テーマセッション「「フクシマ」をひらく―原発事故をめぐる社会の現在と未来」で発表した原稿を、その後の事態と思考の展開を踏まえて、改稿したものである。特に第３節とむすびはほぼ全面改稿した。本セッションの企画をされた直野章子氏（広島市立大学）、コメントをされた吉原直樹氏（大妻女子大学）に感謝を申し上げたい。
[2] 関西学院大学災害復興制度研究所・東日本大震災支援全国ネットワーク・福島の子どもたちを守る法律家ネットワーク編（2015）77頁。
[3] 前掲書、79頁。
[4] その一端の解明として、山下・市村・佐藤（2013）を参照。

のかについてハイデガーの言葉から学びつつ（第１節）[5]、被災者・避難者の「住まう」とはどのようなものであったかを想像し、原発事故によって喪われたものの大きさ・取り返しのつかなさに思いをよせつつ、近づいていこうとすることであり（第２節）、そして、そうした取り返しのつかない出来事の背景にある理由をその根源に遡って掴まえることである（第３節）。第３節は、結果的にハイデガーの議論の紹介の域をあまり出ないものにとどまったが、「むすび」においてそこからさらにどのような方向に思考の歩みを進めるべきか、次の検討のための手がかりを示して本稿はとじられる。

１.「住まう」ということ

災害は、人間の生命を奪い、住む場所を破壊する。住む場所を失った人は、安心して生活できる場所を求めて移動する。そのような場所を見つけるまで、移動は続く。そうして、運よくそうした場所を見つけられた人は、そこに留まる。住むとは留まることである。そのことは、言葉の上からも言える。漢和辞典によれば、漢字の「住」とはそもそも、「とどまる・とどめる」を意味したのであり、魏普以降になって「居住する」という意味が現れたのだという[6]。実は、西洋の言語でも同じことは言え、ハイデガーの「住まう」ことについての考察もまさにその点を確認しながら進められる。

論考「建てる・住まう・考える」（Bauen Wohnen Denken）[7]の中でハイデガーは、「住まう」を、「建てる」ことひいては「考える」こととの関係から考察する。論考のもとになった講演は、第二次世界大戦で破壊された「ドイツの復興」のために、ドイツ工作連盟の主催で開催されたダルムシュタット会議で行われた。ところが、講演の中でハイデガーが目指したのは、時事的な社会問題の評論とはかけ離れた、『存在と時間』（1926年）以来の彼の課題である、存在するということの原義の解明であった[8]。

ハイデガーはこの講演の中で、存在することを、「住まう」として捉え、一般的な常識の錯誤に光をあてる。我々は通常「建てること」を通して「住まうこと」がなされると考える。建物を建て、そこに住む、と考える。住むことが目的となり、建てることが手段となっているのである。しかしそのような目的手段の図式では、「住まう」ことが「宿所を占めること」でしかなくなってしまう。そしてそれは、彼にとって、住まうことではない。

ハイデガーによれば、そもそも「建てる（bauen）」の古語 buan は「住まう」という意味であり、それは「留まること、滞在すること」を意味した。そしてその語の由来は「ある・いる（bin）」という語の変化形にあった。この原義によれば現代人にとっては普通である職住分離のように、住まうことは、「ここに住んで、あそこで働いている」などと他のことから分けられるものではない。「人間は＜住まう＞かぎりで＜存在する＞」[9]のである。

一方で人間は、自分のいる場所において、作物を育て、建築物を建てる。そのことが長く続くと、bauen からは、もともとあった「ある・いる」の意味が忘れられてしまい、「育てる」「建てる」の意味だけが残るようになる。ハイデガーは存在の原義に立ち返り、この忘れられた沈黙の言葉に耳を傾けようとする。「建てる」は、もともと「ある」に由来し、「住まう」を意味したのである。「建てる（bauen）」に存在の原義をみてとったハイデガーは、続いて「住まう」に耳を傾ける。

ハイデガーによれば、「住まう（wohnen）」の古語 wuon（サクソン語）、wunian（ゴート語）も「建てる」の古語と同様、「留まること、滞在すること」を意味した。特にゴート語の wunian は「満ち足りていること、平穏に恵まれ、そこに留まること（zufrieden sein, zum Frieden gebracht, in ihm bleiben）」を意味した。ここからハイデガーはさらに次のように述べる。「住まうこと、平穏に恵まれていることは、親しい人（Frye）に囲まれて、つまり自由の身（Freie）となって、すべてが本性のままに守られていることである。＜住まうことの根本性

---

[5] ハイデガーを取り上げる理由は、「住む」ことを哲学的に考えるために、彼の考察がいまなお一つの参照基準であると考えられるからである。例えば、上田（1992）第２章、Ingold（2000）Chap. 10を参照。ナチズムへの協力に関わる問題性はもちろん考慮しなければならないが、本稿は、それをもって彼の哲学を無意味なものと評価することはしない。

[6] 戸川監修（2011）84頁。

[7] Heidegger（2000）／ハイデガー（2008）所収。

[8] 『存在と時間』で問われたのは、存在者の存在の「意味（Sinn）」であった。『存在と時間』以後のハイデガーの思索の道は、『ヒューマニズム書簡』（1947）を境に前期ハイデガーと後期ハイデガーを分かつ解釈がなされていたが、細川（1992）は、1936-37年に「存在の意味」から「存在の真理」への移行があり、さらに1944-46年に「存在の真理」から「存在の場所」への移行が生じたと論じている。第三期は、存在の真理を、存在の場所によって解明することが目指されたのであり、「建てる・住まう・考える」のモチーフもそれである。

[9] Heidegger（2000）S. 149／ハイデガー（2008）９頁。なお、以下の論述で邦訳から引用する場合、一部、語句を修正していることがある。

格は、このような保護（Schonen）にほかならない。＞」[10]

ここで述べられている「本性のままに守られる」とはどのようなことを意味するのだろうか。ひとまずハイデガーの考察の結論だけを述べておこう。ハイデガーは、「住まう」ことの原義は「死すべきものどもがこの大地の上に留まること（Aufenthalt der Sterblichen auf der Erde）」であると解釈し、そこには、この「大地の上に（auf der Erde）」、「天空の下で（unter dem Himmel）」「神的なものどもの前に留まること（Bleiben vor den Göttlichen）」と「人間が互いに帰属しあうこと（gehörend in das Miteinander der Menschen）」の意味が含まれるという。そして、この四者、すなわち大地・天空・神的なもの・死すべきもの（人間）の「四方界（das Geviert）」を守ることが、「住まう」ことであるとする[11]。そしてハイデガーはさらに続ける。「住まう」こととは、四方界をその本性のままに守ることである。しかるに、住まうことそれ自体を守るものは何か。ハイデガーは、「物（Dinge）」の傍らに留まること、さまざまな「物」の間に滞在することによって、住まうことは守られると述べる[12]。

ハイデガーにとって「物」とは、大地・天空・神々・人間という四方界を取りあつめ、それらの立脚地となる場所を与えるものである。例えば橋は、単に川や海峡の上に渡された通路というものではない。それは、両岸をつないで大地をまとめ、嵐や大雨に備えて天空のうちの水の流れを引き受け、死すべきものたちの往来の場となり、様々な俗事を通り過ぎて神的なものに近づいてゆき、そのようにして四方界を取りあつめる。このようにして「物」は「四方界」の宿る足場となる。この「物」の間に佇むことが、「住まう」を守るのである[13]。

ハイデガーの議論は、私たちの生活の現実からかけ離れているもののように感じられるかもしれない。そもそもそれが何を意味しているのかを解釈することも大きな課題である。しかしここでは、本稿の目的に即して、厳密な解釈を求める作業はひとまず脇に措き、大きな意味の方向性を確認してその意義を考えておくにとどめよう。

四方界を語るモチーフの背後には、私たちの「住まい」が、大地や天空、神々や人間から切り離された、無機的な宿泊所のようなものになっている現実があるから、と考えてみると、ハイデガーの言わんとするものが見えてくるのかもしれない。私たちがこの世界の中に存在することとは、例えば、経済システムの中で何らかの役割を果たすことだけに還元はできないはずである。だが、ビジネスばかりに価値があるとされる社会では、経済システムの一齣として機能するために、死すべきものに一時の安らぎを与えるだけの「住まい」もまた、人間が「住まう」場所となりうるだろう。ハイデガーは人間が「住まう」ことについて、このような、社会の一機能連関の中においてのみ捉えるのとは異なる見方を提出している、とまずは理解しておこう。その上で、ハイデガーの「住まう」に関する考え方が有する意義そのものを考えてみると、それは、かつてあったと想像される世界を呼び覚ますノスタルジックな呼びかけのようにもみえ、したがって現代社会からみれば、資本主義社会の現実を無視した非現実的な物語のようにも思える。しかし、ここでは視線を直ちに現代には向けず、より大きな人類史的な視野のもとでその意義を考えてみたい。

哲学研究者の国分功一郎は、人間の本質を住むことに見ているハイデガーの人間観は定住中心主義的で、人類が定住をはじめた定住革命以後の一万年にしか通用しないものかもしれない、と指摘している[14]。ハイデガーの定住中心主義を批判しつつ―というのは、人類はそれ以前に十九万年も移動生活をしていたのだから、定住を人間の本質とは考えにくいから―、しかしその一方で国分は、ハイデガーの「住むことをはじめて学ばねばならない」という言葉を真摯に受けとめようとする。国分は、原発事故が発生した最中で、それまで生活してきた土地に住むことができない人が数多く出ることを予測し、そのことに涙しながらハイデガーについての注を書き加えたのである[15]。

定住中心主義という国分のハイデガー批判に着目して、さらに考えてみよう。国分は、ハイデガーの「住む」を「定住する」に引きつけて解釈しているが、むしろ「住む」の原義にある「留まる」に重点をおいて解釈するならば、その批判は的を射ているとは言えないかもしれない。たしかに田舎に留まり、山荘に篭ったハイデガーの生涯を考えると、定住中心主義というハイデガー解釈は妥当なものにも思える。しかしハイデガーは、次のように述べている。「われわれが移動しても、（その時々の）

[10] Ebd., S. 151／前掲書、14頁。
[11] Ebd., S. 151／前掲書、14-15頁。ここで引用した「四方界」という鍵語をハイデガーは1949年のブレーメン講演から使用している。
[12] Ebd., S. 153／前掲書、18頁。
[13] 人間が生きる世界における「物」の意義については、森（2013）を参照。
[14] 国分（2015）100頁。
[15] 国分（2015）はもともと2011年10月に朝日出版社から刊行されている。国分が震災後、出版準備中だったこの本にハイデガーに関する注を書き加えたことについては、東（2013）268頁を参照。

空間の中に立つのを止めることはない。というより、われわれは、近くても遠くても場所や物の傍らに留まることで、すでに、それらの空間に持ち堪えている。そのようにして、それらの空間を絶え間なく通り抜ける」[16]。

移動する遊牧民も「空間」の中に立ち、テントや馬具などの「物」の間に留まっている。重要なことは、定住ではなく、物の傍らにて留まるということなのである。そして、「物」とは、大地・天空・神的なものども・死すべきものども（人間）の「四方界」を取りまとめ、守るものであった。ハイデガーの「住まう」は、定住革命以降の妥当性しか有していないとはいえない。むしろ、この世界を象徴的に捉えることで、広範囲の人間と協力関係を結ぶことが可能となった「認知革命」以降の人類に妥当する意義を有していると思われる[17]。

次節では、被災者・避難者にとっての「住まう」ということについて、ハイデガーの論考を手がかりにさらに考えていこう。

2．被災者・避難者が失った「住まう」こと

原発事故避難者の証言や行動から感じられることは、彼らの原発事故以前の「住まう」が、ハイデガーの言う意味での「住まう」の特徴を色濃くもっていたということである[18]。いくつかの避難者の声を集めた書物から、このことを確認してみたい。

『原発避難論』（2012年）[19]は、原発事故直後の、秩序の動揺がまだおさまっていない時期の雰囲気を濃厚にたたえている。事故からの避難、そして避難所、仮設住居での生活というめまぐるしい変化の中で、生活の見通しが立たないことへの不安、気持ちの整理が付かないこと、制度の不合理性への不満、故郷への強い愛着、喪われた生活への悔しさが、被災者・避難者の口から語られている。例えば、飯館村の70代の女性は次のように語っている。

「ここらの人たちってのは収入なんか微々たるもんでもよ、米でも野菜でも食うもんにはこと欠かねぇし、古くたって住む家はあるわけだし、要はお金なんかかけずに何とか生活できてたのよ。それによぉ、例えば山菜採りやらキノコ採りなんてのは私ら当たり前にやってきたことだけど、ここと同じもんはどこ行ったって採れねぇよ。米だって野菜だってそうだ。ここはキレイな水があってよ、米作りの時期には気温差があっからうまい米が採れんだ。…ほかさ行ったら、そんな当たり前のことができねぇくなっちまうのよ。私らはそういったもんを全部奪われちまったんだぁ。…何が悔しいかって、そうした当たり前のもんをみんな失っちまうことなんだぁ。本当に悔しい。」[20]

「建てる・住まう・考える」の２年前になされたブレーメン講演（1949年）の中で、ハイデガーは四方界について次のように説明をしている。「大地とは、建てつつ担うものであり、養いつつ実らせるものであり、はぐくむ水源や鉱石、植物や動物からなる全体である。……／天空とは、太陽の運行であり、月の推移であり、星々の輝きであり、一年の時節であり、昼の陽光、あけぼのとたそがれであり、夜の暗さと明るさであり、天候の恵みと厳しさであり、雲の流れと深い青空である」[21]。被災者・避難者がかつて住んでいた場所は、古いが「住む家」があり、そこで天空からもたらされる雨や風と、大地の水源や土によって作物を育てる、そのような「住まう」であった。

失われたのは、大地の上、天空の下の「住まう」だけではない。「死ぬべきものども」が「神的なものども」の前にとどまり、互いに帰属しあうことも失くなった。次の言葉は、先にも引用した『原発避難論』の中の、飯館村を離れた60代の男性の言葉である。

「やっぱり家族は一緒に住んでいたいよね。でもみんな仕事場も学校も違うから、飯館だったら一緒に住めたけど、福島市内とか南相馬市とか、この村から避難すると、やっぱり家族は分散しなきゃなんないよね。でも、一度バラバラになったら、その後また戻って一緒に暮らそうと思っても、それは恐らく無理だと思うな。…俺だって本当は孫たちと一緒に暮らしたいんだけどね。もう俺が死ぬまで無理だろうなぁ。」[22]

被災地の住民は比較的大きな一戸建ての住宅で、三世

---

[16] Heidegger（2000）S. 159／ハイデガー（2008）34-35頁。

[17] 「認知革命」について簡潔な見通しを与えるものとしては次を参照。ハラリ（2016）上巻、第一部、特に54～58頁。ただし、ハラリがホモ・サピエンスの「成功」と語るものを、ハイデガーならば「四方界」と「総かり立て体制」の、両義的で、後者が優位となってゆく過程として語るだろう。

[18] この符合は、偶然ではない。大都市ベルリンにあるベルリン大学からの招聘を断ったことのあるハイデガーは、自己の仕事を農夫とつながるものと理解していた。都会の欺瞞性を避け、農夫の土着性の近くにいたハイデガーの「四方界」の叙述は、もともと農村の土着的な生を土台にしていたのである。

[19] 山下・開沼（2012）。

[20] 山下・開沼（2012）110頁。

[21] Heidegger（1994）S. 17／ハイデガー（2003）23頁。

[22] 山下・開沼（2012）111頁。

帯で生活する人が多かったという。それは、ハイデガーの言葉でいえば、「死すべきもの」がこの大地の上に共に留まる場であった。原発事故が奪ったのは、「死すべきもの」が親しいものに囲まれて生活する、そのような「住まう」であったということができる。

だが、それだけでない。ハイデガーによれば、「死すべきもの」はその本性において「死としての死に向かう能力を持つ」[23]。ところが、『原発避難者の声を聞く』(2015) は避難者の状況を次のように伝えている。「長引く避難生活のなかで高齢者たちは、「いったい自分はどこで死を迎えるのだろうか」と考えあぐねる。高齢者同士が集まった際、「自分のうちで死にたいよね」と口にする者は、多い。死ぬまでに本当に富岡町に戻れるかどうかわからないという厳しい現実に直面し、同時に「こんなところ (避難先) で死んでいられない」とふるさとへの思いを強くする」[24]。

避難指示区域から避難してきた高齢者は、自分の生活していた町で、自分の家で最期を迎えたいと願っているが、それを果たせそうもないという見通しの中で、戸惑いや悲嘆の中に置かれているというのである。これは、自分の死を死ぬことの困難といえるだろう。原発事故は、被災者・避難者から「自らの死を死ぬこと」をさえ奪ってしまったのである。

原発事故避難者が奪われたのは、大地の上、天空の下での、死すべきものどもとしての生そのものであった。では、四方界のうちでまだ取り上げていなかったもの、「神的なものども」という点からみた場合、避難者たちの元の生活はどのようなものだったのだろうか。

神的なものどもは、それ自体においてというよりも、それを介した家やコミュニティの活動をとおして現れる。ところで、被災地域のコミュニティが形骸化していたことは、さまざまな論考で指摘されていることである[25]。しかしそれは、避難者が「ふるさと」の喪失を嘆いていないということでは決してない。むしろ、多くの自主避難者にとっても「ふるさと」の喪失はつらいものであった[26]。では、そこでいう「ふるさと」とは何か。

真宗大谷派の僧侶である中下大樹は、岩手・宮城・福島の避難所や仮設住宅を訪問し、のべ2000人以上の被災者に「津波が引いていった直後に真っ先に駆けつけた場所は何処か？」という質問をしたところ、「多くの方が「自宅」と答えたのは理解できるが、その次が「先祖代々の墓」、そして３番目に多かった答えが「神輿のある場所」という答えであったことには驚いた」[27]と述べている。ここに、被災地における「ふるさと」がどのようなものであるのかを理解するポイントがあると思われる。つまり「ふるさと」とは、家族がいる場所、先祖がいる場所、そしてコミュニティの場所と捉えることができるのではないか。特に注意すべきは、２番目の先祖である。宗教社会学者の星野英紀は、避難者のふるさと帰還願望の根幹をなしているのは先祖であると述べ[28]、真言宗智山派の僧侶である伏見英俊は、楢葉町におけるデータ (2011年６月６日から実施された一時帰宅における位牌・遺影に関する質問) に基づいて、「遺影・位牌の継承者は帰町意識が高いと言えるであろう」と推論している[29]。さらに、福島大学災害復興研究所が2011年９月から10月にかけて実施した、双葉郡８町村の避難者を対象とした調査では、避難前の自治体に「条件が満たされれば戻りたい」と答えた人の「戻りたい理由」の上位２つは「暮らしてきた町なので愛着がある」が69.6%、「先祖代々の土地・家・墓がある」が双葉郡全体で64.7%であった[30]。ここからうかがわれることは、被災地住民の「ふるさと」意識を構成するものは、まずもって家族や町への愛着という人間関係にあると考えられるが、しかし先祖や神々という「神的なものども」への意識も決して小さなものではないということ、それどころか、そうしたものを媒介にして営まれる家族や地域の結びつきを視野に入れて考えるならば、住民の「ふるさと」意識の基幹的な部分は「神的なものども」と分かちがたく結びついていると考えられるということである。

以上のように、避難者の言葉やアンケート調査のデータをもとに、事故前の彼らの「住まう」あり方を思い描いてみると、そこには大地の上、天空の下で、神的なも

---

[23] Heidegger (2000) S. 152／ハイデガー (2008) 18頁。
[24] 山本・高木・佐藤・山下 (2015) 21-22頁。
[25] 例えば、吉原 (2013)、吉原 (2016) を参照。
[26] 戸田 (2016) 35頁。
[27] 中下 (2012) 79頁。
[28] 星野 (2016) 189頁。調査対象者は16歳から79歳までの住民で、楢葉町がランダムサンプリングにより無作為抽出した3032名。回収されたアンケートは1609通。一時帰宅で位牌・遺影を持ってきたかという質問に対する回答割合は次のとおり。「持ってきた」41.1%、「持ってこなかった」30.4%、「持ってきたがもとに戻した」1.5%、「もともとない」27%。
[29] 伏見 (2015) 、86頁。
[30] 福島大学災害復興研究所編「平成23年度双葉８か町村災害復興実態調査基礎集計報告書 (第２版)」(改訂2012年２月12日)。次のURLからダウンロード可能である。https：//fsl-fukushima-u.jimdo.com/双葉八町村住民災害復興実態調査/ (2017年５月10日確認)。

のどもの前に留まり、死すべきものどもが互いに帰属しあうという形での「住まう」があったように思われるのである[31]。そして、この四方界に住まうことを守るのが「物」である。「家屋」は、たんに眠るために帰るねぐらではなく、死すべき者の交流を守る物であり、庭や畑とひとつながりとなって、大地の上で、天空の恵みを受ける場所であった。そして多くの家ではその中心に、先祖という神的なものの場としての仏壇と位牌とがあった。原発事故が奪い取ったものは、被災者がこのような仕方で「住まう」場所であったのだ[32]。

3．言葉による住まい

原発事故の被災者、避難者がかかえている困難や苦悩は、彼らが生きていた「住まう」世界の豊かさの故に、なおさら大きい。それは、そもそも金銭で賠償することなどできない。取り返しのつかないことが起こってしまったのである。原発事故の問題を考えるとき、忘れてはならない第一のことである。

それでは、そもそもどうしてそんなことが起こってしまったのだろうか。ハイデガーの言う四方界が守られるような「住まう」場の傍らに、一度事故を起こせばその「住まう」を現実的に破壊しうる原発があったからである。しかしハイデガーは、その問題の原因を原発事故だけに求めることはないだろう。そこにはより根源的な問題が存在したのである。

ハイデガーは、講演「物」(Das Ding, 1950)[33]で、四方界に住まうことを守る「物」を虚無化する科学的知識と原子爆弾について次のように述べている。「科学的知識はその領域、つまり対象の領域において強制力をもっているが、物を物としてはとっくに虚無化してしまっている。これは、原子爆弾が爆発した時点よりもずっと前からそうなのである。原子爆弾の爆発とは、物が虚無化されるという事態がとっくの昔から生起してしまっていることを確証するあらゆる粗暴な証拠のうちの、最も粗暴な証拠でしかない。この場合、物の虚無化(Vernichtung des Dinges)とは、物が物としては虚無的なものにとどまる、という意味である」[34]。

ここにはハイデガー独特の存在史観が述べられている。それによれば、ハイデガーが当時念頭においていた広島・長崎の原子爆弾の爆発も、そして2011年の福島原発事故も、とっくの昔からはじまっていた「物の虚無化」を証明するものだという。ここでいう「物」とは人びとがそこに留まり、四方界を守る役割を果たす「物」である。そのような「物」を、そうした四方界のまとまりから切り離し、対象として表象し、徴用してかり立てるはたらきは、人間の作った物ではない。人間自身が、このような徴用して立てるはたらきのうちへ徴用して立てられているのであり、科学的知識はそのために用いられ、物質の究極にある核エネルギーをも徴用して立てるのである。このはたらきをハイデガーは「総かり立て体制(das Ge-Stell)」と呼び、それを「技術の本質」とみた[35]。

原子爆弾と原発事故は、もちろん、違う。一方は、その成功によって、最も粗暴な形で虚無化を完成し、他方はその失敗によって、虚無化を実現する。しかし、その成功と失敗は、その製造物の目的の違いによって分けられるだけのことであって、そのメカニズムは本質において同一である。原発事故によって、放射性物質が降った地域の「物」は虚無化されてしまった。人びとがそこに留まり、四方界を守る役割を果たす「物」は、もはや「物」として立ち現れることはできない。この「物」が「物」としての役割を果たすことができなくなったところで人びとは、大地と天空の恵みから切り離され、神的なものどもの現われも、死すべきものどもが共に親しく生きる場所も失われていく。ハイデガーはこのような事態を「故郷喪失(Heimatlosigkeit)」とも呼んだ[36]。それは、具体的なある地域としての故郷というよりは、物が物として四方界を守っている、そのような世界の喪失である。その世界の喪失が、被災者の「ふるさと」において生じたのである。被災者は、この故郷喪失の只中で、ある者は帰還を、ある者は移住を決断し、またある者はどうしようかと立ち止まり、揺らいでいる。そして、故郷への

[31] 誤解のないために付け加えるが、この文章が述べようとしていることは、震災前の被災地の生活が理想的なものであった、ということではない。例えば、被災地では3世代で暮らす家庭が他の地域より多かったが、それが可能であった主たる理由は、原発という産業が地元にあったことである(三橋(2014)155頁)。また、その産業の発展にともなって、原発立地以前から住んでいた地域住民に新たな住民が加わり、本文ではふれなかった「土着性の薄さ」が進行したという指摘も覚えておく必要がある(三橋(2014)247頁)。被災者は一つの像で捉えることはできない。しかし、ここであえてこのような被災前の「住まう」を描いたのは、少なからぬ被災者が失ったと考える生活がどのようなものであったのかを理解するための手がかりを提示したいからであった。

[32] 「場所の喪失／剥奪」という観点から被災者の状況を社会科学的に分析したものとしては、齋藤純一(2012)を参照。

[33] Heidegger (1994) u. Heidegger (2000) ／ハイデガー(2003)。

[34] Heidegger (2000) S. 172／ハイデガー(2003) 12頁。

[35] Heidegger (1994) S. 32-33／ハイデガー(2003) 43-44頁。

[36] Heidegger (2000) S. 163／ハイデガー(2008) 46頁。

思いや放射線の恐怖、世間の眼差しの中で、葛藤をかかえながら、それぞれの地に留まっている。この故郷喪失の状態から、私たちはどうすれば回復することができるのだろうか[37]。

ハイデガーは「物化（Das Dingen）」にその回復の糸口を見出している。物化とは、地・天・神・人の「四方界を集約し-出来事として本有化しつつ、やどり続けさせるはたらき」である。物化はいかにしてなされるか。ハイデガーは次のように述べる。「いつ、またいかにして、物は物としてやって来るのであろうか。物は、人間の作為によってやって来るのではない。他方で、物は、死すべきものどもの明敏さ（die Wachsamkeit）なしにはやって来ない。そのような明敏さへ至るための第一歩は、表象的に立てること、すなわち科学的に説明することしかしない思考（das nur vorstellende, d. h. erklärende Denken）から退いて、思いをよせ追想する思考（das andenkende Denken）のうちへ歩み入る、歩み戻り（Schritt zurück）なのである」[38]。

この「思いをよせ追想する思考」とは、それをとおして人間が自らの故郷喪失に思い至る思考である。そして、「故郷喪失に＜思い至る＞や否や、彼はもはや悲惨ではない。このことをよく考えて心を保つなら、それは、死すべきものどもを住まうことへと＜誘う＞唯一の呼びかけとなる」からであるとされる[39]。

この追想する思考を通した悲惨からの回復には、ハイデガーの独特の危機と転回の思考がある。危機とは「待ち伏せて追い立てるはたらきが内的に集成された総体」であり、最も危機的なことは危機の正体が隠されていることである。総かり立て体制の本質は危機であるが、それは技術に覆われてしまい、人はそれを危機として経験してはいない。まさにここに、最大の危機がある。問題を立てて、それを解決するという科学的・技術的思考は、物を徴用し、虚無化し、存在を忘却させる。それは危機の内で働くのであり、危機そのものを露わにするものではない。人間が、総かり立て体制を克服できるとか、技術を生まれ変わらせることができる、ということはないのである。

「だが、危機のあるところ、
救いとなるものもまた育つ。」[40]

原発や原爆のような総かり立て体制のはたらきを本質とする技術も、人間の協力によって運命の変転に導かれ得るとハイデガーはいう。それをハイデガーは「耐え抜き」という言葉を用いて表現する。総かり立て体制が技術の覆いのもとで隠されたままにとどまり、存在が忘却されるのではなく、技術の本質が隠された真理へと「耐え抜かれる」ということがありうるという。「総かり立て体制の耐え抜きが、出来事として本有化される」ということがあるというのだ。それは、別の運命の来着によって。人はそれを待つことができるだけなのだが、それを待つには「おのれの本質空間に住みつき、そこに住まいを定める」ことが求められる。

そのために第一に必要なことは、「まずは存在の本質を、思考に値する事柄としてそもそもはじめて熟考すること」である。そしてそれができるのは、「われわれは何をなすべきか、という問いに優先して、われわれはどのように思考しなければならないか、という問いをわれわれがひたすら熟考するときのみ」である[41]。ここに言う思考とは、存在の語りかけに応答する言葉による語りであり、そのような思考の内で人間は「存在の運命の耐え抜き、つまり総かり立て体制の耐え抜きが出来事としておのずと本有化される領域のうちに住むということを、はじめて学ぶ」[42]。ここに、総かり立て体制という危機としての存在は、おのれの本質の真理に向かっておのれを転回させる、とハイデガーは述べる。この、「存在」（Sein）の忘却から、「現有」（Seyn）の本質の守護への転回を、その真理を、人は「存在の牧人」として、待ち受けるのである。

以上、物の虚無化と総かり立て体制に関するハイデガーの思想を紹介した。原発事故とそれによる故郷喪失とは、ハイデガーによるならば、物の虚無化、存在の忘却を証明する出来事であり、これまで総かり立て体制という危機が危機として露わになることなく、技術によって覆われてきたものが、露わになったということである。このようなハイデガーの見方を共有するとき、技術

[37] 本稿は、住まうことの哲学的な考察に限定される。具体的な「住まい」の再建の考察については、例えば平山・斎藤（2013）を参照。ハイデガーの四方界は、他の学問の論点にも重なりつながっていく。例えば「大地」と「天空」は自然環境と、「死すべきものども」は行政やコミュニティと、「神的なもの」はケアや文化と関連する。ただしハイデガーは、諸学における思考が「表象的・説明的思考」にのみ陥るならば、それは四方界を追放することになると警告するだろう。

[38] Heidegger（1994）S. 20／ハイデガー（2003）、27頁。

[39] Heidegger（2000）S. 163／ハイデガー（2008）、46頁。

[40] Heidegger（1994）S. 72／ハイデガー（2003）、90頁。

[41] Ebd. S. 71／前掲書、89頁。

[42] Ebd. ／前掲書、同頁。

をより高度にすることによって、あるいは安全基準をより厳しくすることによって事故を回避しようとすることは、危機の隠し立てにしかならないということがわかる。それでは、この根源的な存在の次元の問題に対して、人は何をすることができるのだろうか。ハイデガーは次のように考える。人は、存在の声に応答する言葉による思考を重ねつつ、存在の運命が本質の真理に向かっておのれを転回することを待ち受ける、存在の牧人たらねばならない、と。そこに人が「住む」ときに、総かり立て体制は真理に向かって耐え抜かれるだろう、と。

ここに、四方界に「住まう」というのとは別の、もう一つの「住む」あり方が提示されている。そこで天空・大地・死すべきものども・神的なものどもについて語られないのは、総かり立て体制という技術の本質が支配する中で、それらが散り散りになってしまっているからであろう。そして、そのような故郷喪失の只中で、四方界の現成という運命の転回を待つべく、――重ねて言おう――人は存在の声に応答する言葉による思考を重ねつつ、存在の運命が本質の真理に向かっておのれを転回することを待ち受ける、存在の牧人たらねばならない。まさしくそれと同じように、原発事故と避難によって被災地の「住まう」がばらばらになってしまい、その運命に耐えるほかない人びとの中にも、言葉による思考の大切さに気づき、言葉の営みを通して、「住まう」を取り戻そうと試みている人がいる。

福島県で高校教師をつとめる詩人の和合亮一は次のように述べている。

「実は、先日の南相馬でこんなお話がでました。例えば避難先で「大変だったね」と、どんどん相手の方に言われてしまう。あるいは、「ふるさとに戻れないんでしょう」と。だんだんとそのことだけが焦点化され定型化してしまう、と。相手から言われることがみんな同じで、自分自身が消えてなくなってしまうような思いを抱えて悩んだ。避難した方々は、このようなことにものすごく苦しんでいる、と。」[43]

被災者を定型的に見る言葉の貧しさは、いかに同情心に富んでいるものであれ、被災者の「住まう」を貧困化していくのである。同じ書物の中の対談で、作家の柳美里は次のように述べている。

「南相馬は、原発事故以降は汚染された土地として報道されることが多いですが、私は、原発事故以前に営まれていた暮らしを大切にしたいのです。集落ごと、家ごとにその暮らしぶりは異なり、それぞれに物語があるのです。そして、物語でいちばん重要なのは、細部です。／たとえば、南相馬の私の家の台所には正方形の窓があり、庭の向こうに電線が見えます。いまちょうどカラスの巣立ちの時期なのです。親ガラスと同じ大きさに成長した小ガラスが雛ぶって頭を低くしてガーガーと羽をばたつかせて餌をねだっているのが。親ガラスは巣立ちを促すために無視しているのですが、小ガラスがしつこい。しまいには、親の頭をくちばしでつついたりする(笑)。」[44]

このように述べた柳はさらに、庭にグランドカバーの種を蒔いたときのことを語る。種まきを終え、汗を拭って、メガネを掛け直したら、種が動いている。錯覚かと思ったが、よくみると蟻が種を巣に運ぼうとしていることに気がついた。「その様子が奇跡みたいに美しかった。そういう美しさが、人の暮らしの細部には宿るのです。私は、ささやかな美を見逃さずに、南相馬で生きていきたいと思っています。」[45]

被災地／避難先の「住まい」を、被災や避難にのみ焦点化し、定型化するのではなく、それだけで語られることのない生活の細部に目をおくること。ハイデガーが述べる「おのれの本質空間に住みつき、そこに住まいを定める」ことが、和合や柳がここで述べていることとどこまで重なるのか、はっきりとはわからない。しかしながら、ハイデガーの言葉は「正解」を述べているわけではない。私たちは、奪われた「住まい」からの回復の道筋の一つの手がかりをもとめてハイデガーを読んだのであり、そうした方向性において、被災地／避難先でどのような言葉が語られているのかを探り、被災地／避難先に住むことの、あまり目を向けられることのない豊かさを探ろうとした。それは、被災地／避難先に留まる人の失くしたものを理解し、そこで新たに見出しうる豊かさを想像するためである。

むすび

本稿の目的は、東日本大震災と福島第一原子力発電所の爆発事故によって、住む場を奪われ、以前のように暮らすことができなくなった人びとが受けた被害とはどのようなものであるのか／あったのか、またそのような被害をもたらした背景に何があったのかを、ハイデガー哲学の視点から読み解くことであった。それは、ハイデ

[43] 和合(2016)38頁。
[44] 前掲書、40頁。
[45] 前掲書、同頁。

ガー哲学を手がかりとしつつ、被災者が奪われたものをより深く理解すること、またそれを取り戻すために進むべき方向性を探究することを動機とするものであった。

ところで、たしかにハイデガー哲学の示すもの、物の虚無化や総かり立て体制の分析は鋭く、福島原発事故とそれがもたらした事態をも射程に収めるものではあるが、しかしながらその思考をなぞることに留まることは許されないだろう[46]。「だが、危機のあるところ、救いとなるものもまた育つ。」という詩人の言葉は真実かもしれないが、救いとなるものは自ずと自然に育つわけではない。今ある、この場で、救いとなるものをいかに育てるのかは、我々自身の課題である。

被災地や避難先には、今なお過去との折り合いをつけられない多数の人びとがいるという現実を忘れることはできない。東日本大震災の行方不明者数は、震災後６年を迎える2017年３月８日現在で2554名にのぼり、身元が判明しない遺体は69体である[47]。行方不明者のいる家では、遺体が見つからないままに死亡届を出して葬儀をするか、あるいは探し続けるか、選択できない選択を迫られている。行方不明者の多くを占めるのは宮城県、岩手県で、その内訳は宮城県1231人、岩手県1122人である。本稿が取り上げた原発事故が起きた福島県の行方不明者数は197人で、その数は宮城、岩手と比べると多くはない。しかし福島県には77,283人（2017年３月段階）もの避難者がいる。生活していた土地から切り離されてしまった無念さ、しかもそれが原発という、それによって地域が潤ったこともある発電所の事故によるということのやりきれなさは、原発の恩恵を知っている世代の大人だけでなく、子どもたちも学び、感じとっていることである[48]。もちろん、そうした潤いとは関係なく事故の被害だけを受けた人びとの無念もある。それは、ハイデガー哲学を手がかりにした本稿の分析では、手付かずのままにしている闇である。

この闇から何が生まれるのだろうか。さらなる危機を招くものが生じているのか、あるいは救いとなるものが生まれつつあるのか。いずれになるかは、この闇が生まれたときを同時に生きている私たちが、共にどのように生きようとするのかにかかっている。先に紹介した柳美里のいう、奇跡みたいに美しい自然を見てそれを言葉に表わすことや、若松英輔がいう、死者との対話という営みを深めること[49]が、闇に置かれた気持ちに光をもたらすかもしれない。和合亮一が伝えているように、被災者の言葉の回復こそが、彼らの存在の、彼らの住まう場所の、回復に通じるからである。言葉は発せられている[50]。それに耳を傾けるかどうかが、被災者ならざる者に問われている。

参考文献

東浩紀（2013）『震災ニッポンはどこへいく』株式会社ゲンロン.

アンダース，ギュンター（1994）『時代おくれの人間』（上下２巻）法政大学出版局

上田閑照（1992）『場所―二重世界内存在』弘文堂.

関西学院大学災害復興制度研究所・東日本大震災支援全国ネットワーク・福島の子どもたちを守る法律家ネットワーク編（2015）『原発避難白書』人文書院.

国分功一郎（2015）『暇と退屈の倫理学』太田出版.

齋藤純一（2012）「場所の喪失／剥奪と生活保障」、齋藤純一・川岸令和・今井亮佑『原発政策を考える３つの視点』早稲田大学出版部.

戸川芳郎監修（2011）『全訳漢字海（第三版）』三省堂.

戸田典樹（2016）『福島原発事故―漂流する自主避難者たち―実態調査からみた課題と社会的支援のあり方』明石書店.

直江清隆（2012）『災害に向き合う―高校倫理からの哲学

[46] ハイデガー哲学に潜む他者の不在やある種の運命論が、複数の人間が共同で生きなければならないこの世界において、ある種の危険性を有していることについてはすでに多くの指摘がなされてきている。ハイデガーに学び、あるいは批判した哲学者らの仕事は、ハイデガー哲学の問題をどう乗り越えていくべきか、その方向性を示している。ハンナ・アーレントは、孤独に死に向かう人間の真性性ではなく、誕生する人間の複数性に人間の条件を求め（例えば、森（2008）を参照）、ハンス・ヨナスは、総かり立て体制の運命的転回ではなく、技術が及ぼす影響とそれに対する倫理的努力のあり方を探究し（ヨナス（2000）を参照）、ギュンター・アンダースは、原子爆弾をたんなる存在忘却の証明とみるのではなく、そこに存在者の存在が真に問われる、つまり人類が無となりうる問題の次元を認め、「世界が最終的にわれわれのいない世界にならないために」、時代に応答しようとした（アンダース（1994）を参照）。

[47] 産経新聞2017年３月８日。http：//www.sankei.com/affairs/news/170308/afr1703080033-n1.html（2017年５月10日確認）。

[48] 大野太輔「いじめ、不登校、諦め…原発事故で故郷を奪われた子どもたちのその後」2017年３月10日。http：//gendai.ismedia.jp/articles/-/51169（2017年５月10日確認）。

[49] 和合亮一（2016）28頁。この点については、本稿でふれることはできなかった。若松（2012a）（2012b）を参照のこと。

[50] 冒頭に引用した避難者の市村高志は、新聞記者の質問に次のように答えている。「苦しいけど、私は避難者であり続ける。本当は過去にふたをして、避難生活から抜け出したい。でも避難者がいなくなったら、被害も加害の責任もないことになり、すべて終わってしまうから」（朝日新聞2017年５月５日朝刊）。これは、６年前の事故を忘れかけている私たちを突き刺す言葉である。

別巻』岩波書店.
中下大樹 (2012)『死ぬ時に後悔しないために今日から大切にしたいこと』すばる舎.
ハイデガー，マルティン (2003)「有るといえるものへの観入」(1949)、『ブレーメン講演とフライブルク講演』森一郎、ハルトムート・ブフナー訳、創文社、所収.
ハイデガー，マルティン (2008a)「建てる・住まう・考える」(1951)、『ハイデッガーの建築論―建てる・住まう・考える』中村貴志訳・編、中央公論美術出版、所収.
ハイデガー，マルティン (2008b)「詩人のように人間は住まう」(1951)『哲学者の語る建築―ハイデガー、オルテガ、ペゲラー、アドルノ』伊藤哲夫・水田一征編・訳、中央公論美術出版、所収.
ハラリ, ユヴァル・ノア (2016)『サピエンス全史』河出書房新社.
平山洋介・齋藤浩編 (2013)『住まいを再生する―東北復興の政策・制度論』岩波書店.
伏見英俊(2015)「原発事故被災寺院の諸相―「有志の会」の和解交渉から見た東日本大震災」、『現代密教』第26号所収.
星野英紀 (2016)「震災からの復興と宗教文化の行方」、国際宗教研究所編『現代宗教2016』国際宗教研究所.
細川亮一 (1992)『意味・真理・場所』創文社.
三橋喬 (2014)『さまよえる町―フクシマ曝心地の「心の声」を追って』東海教育研究所.
森一郎 (2008)『死と誕生：ハイデガー・九鬼周造・アーレント』東京大学出版会.
森一郎 (2013)『死を超えるもの―３.11以後の哲学の可能性』東京大学出版会.
山下祐介・開沼博 (2012)『原発避難論―避難の実像からセカンドタウン、故郷再生まで』明石書店.
山下祐介・市村高志・佐藤彰彦 (2013)『人間なき復興―原発避難と国民の「不理解」をめぐって』明石書店.
山本薫子・高木竜輔・佐藤彰彦・山下祐介 (2015)『原発避難者の声を聞く―復興政策の何が問題か』岩波書店.
吉原直樹 (2013)『「原発さまの町」からの脱却―大熊町から考えるコミュニティの未来』岩波書店.
吉原直樹 (2016)『絶望と希望―福島・被災者とコミュニティ』作品社.
ヨナス、ハンス (2000)『責任という原理―科学技術文明のための倫理学の試み』加藤尚武監訳、東信堂.
若松英輔 (2012a)『魂にふれる―大震災と、生きている死者』トランスビュー.
若松英輔 (2012b)『死者との対話』トランスビュー.
和合亮一 (2016)『生と死を巡って―未来を祀る　ふくしまを祀る』イースト・プレス.
Heidegger (1994), Martin Heidegger Gesamtausgabe III. Abteilung： Unveröffentlichte Abhandlungen, Band 79 Bremer und Freiburger Vorträge, Vittorio Klostermann.
Heidegger (2000), Martin Heidegger Gesamtausgabe I. Abteilung： Veröffentlichte Schriften 1910-1976, Band 7 Vortäge und Aufsätze, Vittorio Klosermann.
Ingold, Tim (2000), The Perception of the Environment. Essays on Livelihood, Dwelling and Skill, Routledge.

What is it - the Exile from the Fukushima Nuclear Power Plant Disaster? Considering from the Perspective of Heidegger's Philosophy.

Masahiko KABURAGI

Abstract

Six years have passed since the Fukushima nuclear power plant accident. A lot of problems that the victims of this accident have faced are not solved yet. But many people outside Fukushima have already forgotten what happened 6 years ago. Bullying the students who take refuge from Fukushima happens in various places in Japan, and a Minister for Reconstruction uttered an inappropriate remark on the people fleeing to safety. This paper aims to explore the problems that are behind the current situation about the exile from the Fukushima nuclear power plant disaster. What have the victims of the disaster lost? What is it to live in the area that is affected by that accident and in the refuge? First of all this paper considers what it is to live at all from the perspective of Martin Heidegger's philosophy. Next it analyzes the voices of victims and shows that they have lost, in Heidegger's words, "the square-world" (das Geviert) where the earth, the sky, the godly and the mortal are united closely. Finally the paper examines the philosophical cause of the deconstruction of Fukushima nuclear power plant from Heidegger's point of view and focuses on the activities of poets and novelists who try to reconstruct the disaster area by their words. According to Heidegger human beings need to live in the dwelling of words to take back their square-world. This paper concludes that we can understand the situations of the victims better through Heidegger's Philosophy, yet we must go further to explore the darkness that it cannot illuminate.